

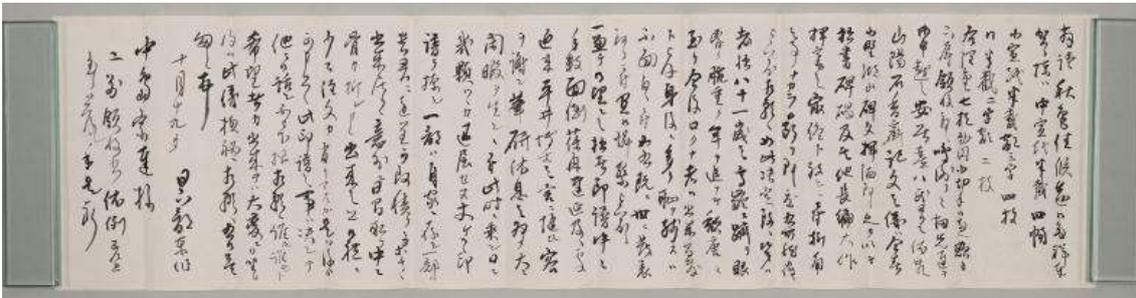
作品解説

(1)―1 なかじまそうたつあて くさか べめいかくしよかん 中島宗達宛 日下部鳴鶴書簡 1通

大正7年(1918)10月19日

縦 18.7cm 横 70.6cm

近代を代表する書家として知られる元彦根藩士の日下部鳴鶴(実名：東作、1838-1922)が、彦根で藩医を勤めた中島宗達(1840-?)へ宛てた書簡。手紙の中で鳴鶴は、「八十一歳之高齡ニ躋り、眼昏ク、腕重ク」と吐露し、大作の制作依頼を今後断って欲しい旨を宗達に伝えています。晩年の鳴鶴の心情や体調を具体的に知ることができる貴重な記述です。また、鳴鶴は手製の印譜(鳴鶴の印影を集めたもの)を特別に宗達だけに贈るつもりであることも綴っています。鳴鶴が宗達を格別に懇意にしていたこと、彼を通じて鳴鶴は自身の揮毫を望む人たちと繋がり、作品制作を行っていたことがうかがえる興味深い資料です。

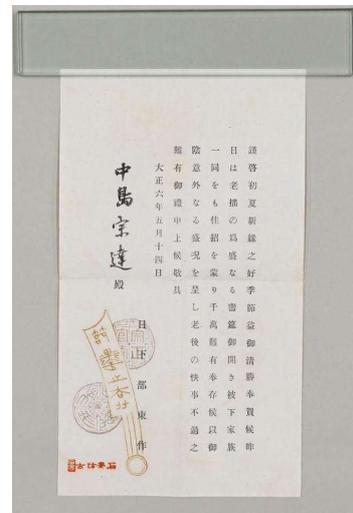


(1)―2 なかじまそうたつあて くさか べめいかくれいじょう 中島宗達宛 日下部鳴鶴礼状 1通

大正6年(1917)5月14日

縦 23.4cm 横 13.2cm

日下部鳴鶴80歳の寿宴の発起人を宗達が務めたことに対する、鳴鶴から宗達への礼状。大正6年5月13日、200人以上の知人や鳴鶴の門人らが日本橋倶楽部(現東京都中央区)に集まり、寿宴が大々的に開かれました。これを機に鳴鶴を会頭とする大同書会が組織され、鳴鶴一門の機関誌『書勢』が発行されるようになります。

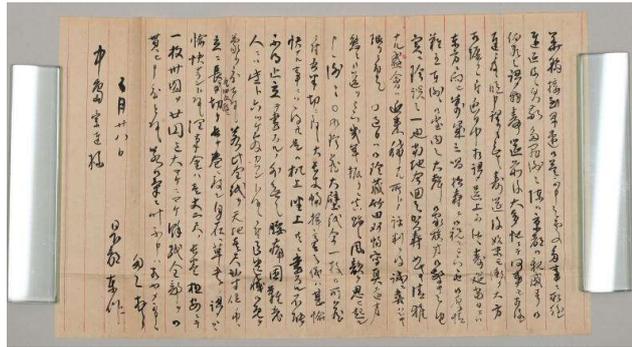


(1)―3 ^{なかじまそうたつあて} 中島宗達宛 ^{くさか べ めいかくしよかん} 日下部鳴鶴書簡 1通

大正6年(1917)5月28日

縦 24.4cm 横 40.5cm

鳴鶴80歳の寿宴への喜びや、宗達が所蔵する^{た の むらちくでん}田能村竹田筆の双幅の写真を見た感想などを、鳴鶴が宗達に宛てて綴ったもの。この書簡で鳴鶴は、^{みやび}「雅ナル盛会ハ近来稀ナル^{まれ}所トノ評判ニ存、誠ニ喜ハシキ限り」と記しており、会の盛会ぶりを垣間見ることができます。また、江戸時代後期を代表する南画家・田能村竹田の作品を介した鳴鶴と宗達の文化的交流もうかがえる興味深い資料です。

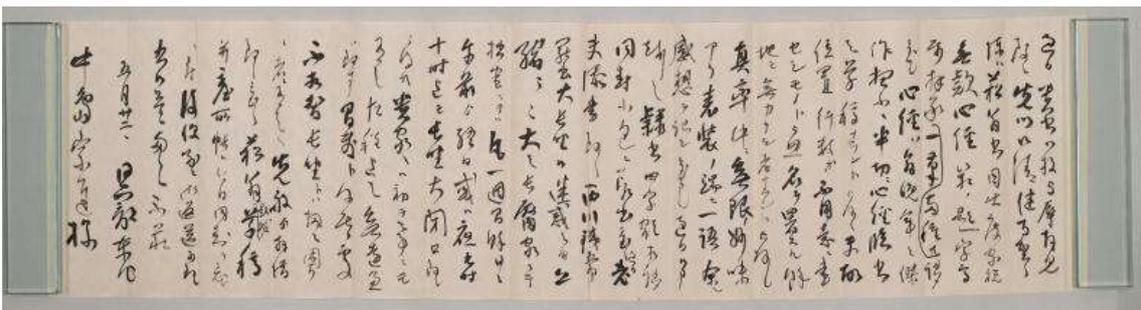


(1)―4 ^{なかじまそうたつあて} 中島宗達宛 ^{くさか べ めいかくしよかん} 日下部鳴鶴書簡 1通

大正7年(1918)5月22日

縦 18.6cm 横 70.1cm

宗達所蔵の^{ぬき な すうおう}貫名菘翁(1778-1863)の書などについて、鳴鶴が宗達に宛てて記した書簡。菘翁は、幕末の三筆の一人として知られ、鳴鶴が私淑した人物でもあります。この書簡によると、鳴鶴は菘翁の書^{ばつぶん}の跋文と箱の題字の揮毫を宗達から依頼され、菘翁の書を実見したことがわかります。書中で鳴鶴は、それを菘翁晩年の傑作である般若心経の草稿と考え、「^{しんそつ}真率中ニ(正直でかざりけのない中に)無限ノ妙味アリ」と極めて高く評価している点が注目されます。実はこの2年後、鳴鶴は菘翁が楷書で揮毫した般若心経の八曲屏風の大作を実見した際も、それを大変賞賛したことが知られています。本書は菘翁筆の心経に対する鳴鶴の並々ならぬ関心と感性が表れた貴重な資料といえ、書道史においても重要な資料といえるでしょう。



- (2)－1 玉手箱雜書乾 1冊
 (2)－2 玉手箱後篇 1冊

江戸時代後期（天保年間）

玉手箱雜書乾：縦26.5cm、横19.4cm 玉手箱後篇：縦26.4cm、横19.4cm

2冊ともに彦根藩士である野津基明（1803～1876、号は亀齡または亀舎）によって編集されたもので、多彩な内容を含んでいます。野津基明は『彦根歌人伝』を著したことで知られています。

(2)－1は、[1]亀舎狂歌集、[2]草中塵芥拾遺、[3]私聞書、[4]金銀制之事、[5]彦根太夫某諫書、[6]書法図解、[7]毒忌和歌、[8]庵原百人首記の8つの内容が収録されています。彦根藩士や彦根住人の狂歌や和歌、彦根藩の歴史に関する内容が中心です。

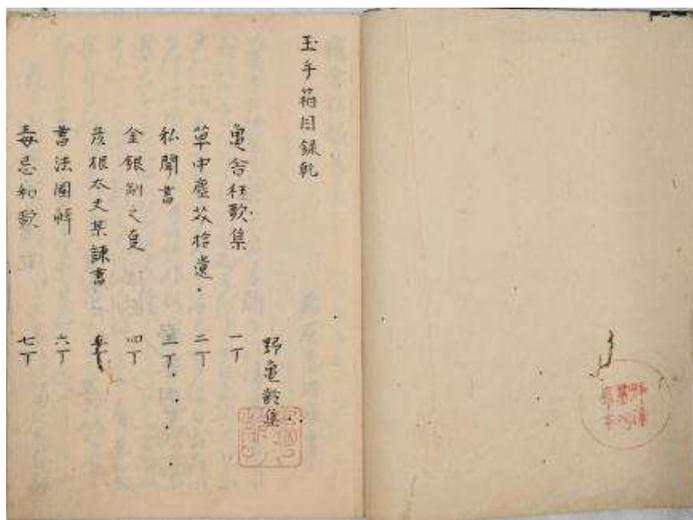
(2)－2は、[1]七拾五人諸士拝借之願書留、[2]雁金返出詠之部、[3]賢聖障子名臣官服考証上、[4]賢聖障子名臣官服考証下、[5]意馬心エン（ひこね かじんてん）之図、[6]紫宸殿賢聖之御障子人物之本記、[7]大日本大相撲関取名前、[8]小野篁並道風卿之系図、[9]彦根年中行事序、[10]諸事初之事が収録されています。彦根藩の歴史に関するものの他、野津基明が京都に行った際に集めたと見られる内容が中心です。

本史料は、「玉手箱八篇 上乾 十五」の記載がある野津基明編「彦根藩士古今家並記等書留」（当館蔵）と一連のものと考えられます。「玉手箱」の全貌は不明ですが、元は数十冊あった可能性があります。

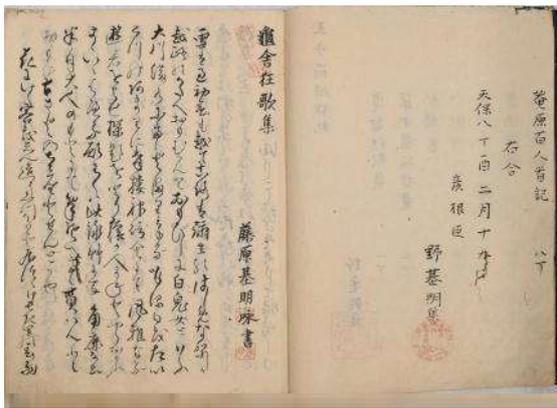
(2)－1には彦根地域史や彦根藩士の人脈を知り得る情報が多く得られる史料が、(2)－2には彦根藩の歴史や野津基明の京都における活動を知り得る史料が含まれます。いずれも、彦根の歴史や、彦根藩士による文化的活動のありようを知ることができる重要な史料です。



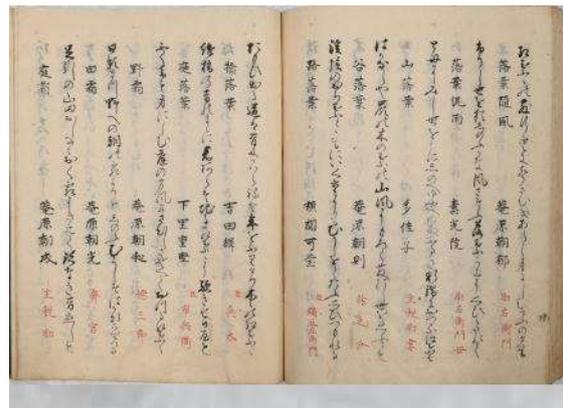
玉手箱雜書乾
表紙



玉手箱雜書乾
目次（前半）



玉手箱雑書乾
目次後半～[1]亀倉狂歌集 冒頭部



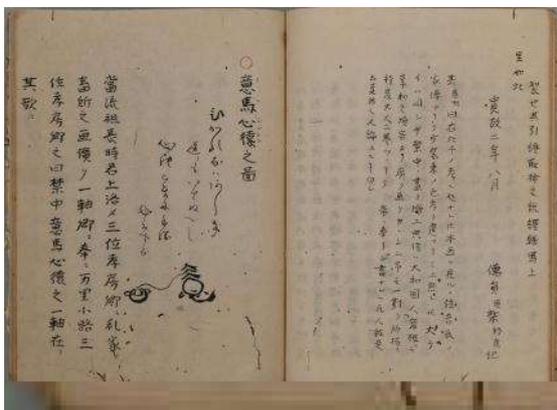
玉手箱雑書乾
[8]庵原百人首記 (部分)



玉手箱後篇 表紙



玉手箱後篇
[1]七拾五人諸士拜借之願書留 冒頭部



玉手箱後篇
[5]意馬心エン之図 前半



玉手箱後篇 奥書